

酒井 邦嘉

読書—驚くべき脳の想像力—

よく「読書離れ」といわれるが、果たしてそうだろうか。一時、読書から遠ざかっているだけで、落ち着いた時間があれば読書を楽しみたいと思っている人はきつと多いことだろう。一度でも読書の魅力に接したことがある人なら、読書の楽しさを忘れることはないと思う。

読書が好きかどうかは、考えることが好きかどうかと関係がありそうだ。読書の醍醐味のひとは、想像力を働かせながら本の内容について考え、さらに空想に耽ることである。アインシュタインが「想像力は知識より重要だ」といったように、想像力なくして読書や研究といった知的活動は成り立たないだろう。

読書に関わる想像力を三つの段階に分けてみよう。最初の段階は、言外の意味のつながりを想像力で補いながら、書かれた内容を正しく理解することだ。外国語で書かれた本で単語の意味を拾っただけではなかなか文意がつかめないのは、個々の単語が持つ様々な意味から文脈に即したものを選び、それを文法に則って再構築する想像力が足りないためだろう。何が書いてあるか分かるだけでも、相当の想像力が必要となる。

次の段階は、伏線としてさりげなく残されたヒントに気がつき、離れた箇所にある記述の関連を想像して深読みすることだ。読書好きの人は、少なくともこの段階にまで達しているだろう。そして最後の段階は、「作意」が分かることである。全体のプロットや目くらまし (Top

herring) の意図が分かるのはもちろん、その文章が書かれた時の作家の心理が想像できるということだ。道尾秀介さんは、文章のページ割りまで計算し、ページをめくった時の効果を考へて小説を仕上げるといっていた。これは「紙の本」ならではの執筆手法であろう。

この想像力の三段階は、音楽・将棋・マジック・絵画など様々な芸術の鑑賞に応用できる。例えば「詰将棋」を例にとると、最初の段階は、解答をみて駒を動かしたとき、王手の連続から読みまでを正しく理解することだ。次の段階は、「変化」手順を含めて自ら読み筋を想像して解くこと。最後の段階は、その作意が分かることだ。全体の構想や「紛れ」を含めて、作品がどのようなテーマで作られたかを想像してみるのは楽しい。

上には上があるもので、優れた芸術作品を生み出すには「鑑賞者の心理を想像する」という、さらなる想像力が要求される。五〇個のかなを一七文字並べただけでも、一〇の二九乗という天文学的な組合せが可能だが、日本語になる確率はごくわずかで、しかも名句になる確率となるとほとんどゼロだ。東野圭吾さんの小説のように、「緻密な伏線、意表を突く展開、強烈な読後感」といった三拍子そろった作品は、俳句の一万倍もの文字数から成る文章を操る名人芸に支えられている。人間の脳は、なぜそのような限られた組合せを発見し、かつ新しいものを創り続けられるのだろうか？ 作家の脳をとことん調べてみたいものだ。

さかい くによし／東京大学 大学院総合文化研究科教授

専門は言語脳科学と脳機能イメージング。著書に『言語の脳科学』(中央公論新社、2002年)、『科学者という仕事』(中央公論新社、2006年)、『芸術を創る脳』(編者、東京大学出版会、2013年)など。